報告

第62回北海道学校保健研究大会
留萌（羽幌）大会

常任理事・地域保健部長　後藤　　聰

「北の大地を生涯を通じて、心豊かにたくましく生きる子どもの育成を目指して」をテーマに平成25年11月17日（日）、羽幌町立中央公民館ほか２会場で開催された。主催は北海道教育委員会、日本学校保健会、北海道学校保健会、羽幌町教育委員会であり、当会ほか北海道歯科医師会、北海道薬剤師会、地元三師会、教育関係団体等が後援した。

以下、概要を報告する。

大会では学校保健功労者表彰が学校医・34名、学校歯科医・48名、学校薬剤師・15名、教職員・６名に対して行われ、受賞者を代表して留萌市学校医の川上康博氏（留萌医師会長）より謝辞が述べられた。

次いで、「学校における感染症対策の在り方」と題して、大阪府済生会中津病院臨床教育部副部長の安井良則氏により基調講演が行われた。

【主な内容】

インフルエンザやノロウイルス感染症等の感染症の集団発生を早期に察知し、その拡大、健康被害の発生を最小限にするためには、まず感染症について正しく理解することが必要である。

「感染」は、病原微生物がヒトの体内に侵入し、増殖した状態であり、「感染症」は病原微生物がヒトの体内に侵入して増殖し、それによってヒトに対して好ましくない反応が引き起こされた状態である。つまり、「感染」＝「感染症」ではなく、また、感染して即発症ではない。

感染対策を行うために「感染経路」を正しく理解しておく必要がある。感染経路には１．飛沫感染、２．空気感染、３．接触感染、４．経口感染がある。

飛沫感染対策として発病者の隔離が挙げられるが、発病者のみを隔離しても有効な対策とならない場合が多い。そのほかの対策として学校の臨時休業も挙げられるが、これも一時的な発生を防ぐことはできても流行は防ぐことはできない。以上のことを踏まえると、集団生活における対策で効果が期待できるのは、咳エチケットだけである。

集団生活における接触感染対策には、職員の手洗いのレベルを向上・維持し、その上で子どもたちの手洗いのレベルを可能な限り上げることが重要である。ペーパータオルの使用が最も効果が高いが、学校の手洗い場に常備されていないのが現状である。

空気感染対策については、結核は長時間空間を共有しないと感染しないが、麻しんや水痘はたとえ短時間であっても感染していることが多いので、これらの感染症対策にはワクチン接種しかない。

経口感染対策について、調理従事者の徹底した手指衛生による食材の衛生的な取り扱いが効果的である。また、学校において予防すべき感染症の種類と出席停止期間の基準が平成24年４月1日に改正され、新規項目として髄膜炎菌性髄膜炎が追加されている。

ヒトからヒトに感染して国内で流行するほとんどの感染症は、学校、幼稚園、保育所において集団発生しており、学校等での発生・まん延・流行が周辺地域へ伝播し、地域への流行に直結する。このように、感染症流行の対策は、学校や保育施設で実施されてこそ有効な対策となりうることを理解することが重要である。

以下は感染症別の各論である。

ノロウイルス：主症状は嘔吐、下痢。潜伏期間は数時間～数日。症状持続平均期間は１～２日。重症化して長期に入院を要することはまずない。慎重な経過観察が必要。

特効薬はなく、抗生物質も無効である。最も重要なことは脱水を防ぐための水分補給である。

感染経路は経口、接触、飛沫であり、予防方法は適正な手洗い、調理・配膳方法、嘔吐物・下痢便、汚れた衣類の処理である。汚れた衣類は絶対に洗わない。洗濯機で洗うとノロウイルスだらけになる。洗う場合は塩素消毒してから。消毒するときはマスク・手袋を着用し、雑巾・タオル等で吐物・下痢便をしっかりふき取り、その雑巾・タオルはビニール袋に密閉し破棄する。消毒液は薄めた塩素系消毒剤（厚労省は200ppm）を使用する。

インフルエンザ：主な感染経路は飛沫感染。対策の基本は「咳エチケット」で、日頃からヒトに飛沫を浴びせないことを指導する。全員が実行することが重要である。接触感染もあるので手洗いも大切。予防の基本はワクチン接種。効果が無いという意見もあるが、免疫を高め、発症を一番減らす効果がある。日本で一番早いサーベイランスとして、国立感染症研究所の感染症情報センターのHPがある。全国8,000ヵ所の薬局の抗インフルエンザ処方数が翌日に反映されている。

風しん：25年の累積報告数は1,400人超。男性が定期接種の対象外なので圧倒的に多い。女性は20代後半から30代前半の接種率が低く、妊娠出産適齢期なので問題である。妊婦、特に妊娠初期に罹患すると胎

児が感染し、難聴、心疾患、白内障、精神や身体の発達遅延等の障がいを持った赤ちゃんが生まれる可能性があり、それは７～８割という論文もある。

── ◇ ──

基調講演終了後、午後から部会別研究協議が行われた。

§第１部会：学校経営と組織活動
§第２部会：保健管理・保健教育
§第３部会：安全管理・安全教育
§第４部会：発達障がいを含む障がいのある子どもの保健教育・安全教育

このうち第２部会の発表を紹介する。

1.「啓徳小中学校のフッ化物洗口の取組」
天塩町立啓徳小中学校　教頭　中村　倫生

平成21年６月に「北海道歯・口腔の健康づくり8020推進条例」が施行され、道教委は「フッ化物洗口普及事業実施要項」を定め、平成22年度に留萌小学校が指定校となり実践を行った。本校は天塩町教育委員会と協議し、留萌小学校の実践を参考に平成23年５月に普及事業計画書を提出し、12月から希望制で保育所は週５、小学校は週１回の洗口を開始した。フッ化物洗口については、学校安全計画、学校保健計画において「安全な実施、薬品の点検を教頭と養護教諭、担任を中心に行いながら、全職員での周知を図る」こととされており、実施後の残量確認、学期末等における年４回の点検を行っている。

保育所での実施率は開始した平成23年度から100％であり、啓徳小、啓徳中についても実施率は高くなっている（啓徳中については平成23年の実施はなし）。歯科検診での今年度の１人あたりの虫歯数は0.91本で、ここ３年間で減少傾向にあり、未処理、要観察歯数も同じく減少傾向にあることから、実施の効果がみられる。

フッ化物洗口実施に伴い、教育課程への位置付けによる全教職員での指導が、朝晩の歯磨きの習慣化、磨き方や歯ブラシ、歯茎の状態への興味関心、予防への意識の向上につながった。

2.「遠別農業高校の健康教育
～コミュニケーションスキルの育成を目指して～」
北海道遠別農業高等学校　養護教諭　川端　朱美

最近の高校生のコミュニケーションに変化が現れている。メールやチャット、LINEといったツールによる即時的なやりとりは、自分本位のコミュニケーションになりがちで、トラブルへとつながることがある。相手の表情、気持ちを考えて話すことや、自分の気持ちを言葉で伝えることができないと友達関係の構築に影響が出る。

そこで本校では、教職員が生徒の様子をより客観的に捉えるための「アセス」（道教委が作成した適応感調査）、学級のコミュニケーションに関する13の発達段階（到達度）を見るための「ほっと」（北海道教育委員会と北海道医療大学が共同開発したアンケート）を活用している。

「アセス」では生活満足感、教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的関係、学習的適応の６つの対人的適応感の程度を調べることができ、10～90までの指標で、40未満の結果となった際は、何らかの支援を考える必要があるとしている。また「ほっと」はSSで算出され、本校では“拒否”がSS44.3、“自律”がSS44.0と、この二つの到達度がほかより低い結果となっている（全道平均は50）。

そのほか、性教育、薬物乱用防止教室、デートDV講座により生徒が知識を得、自分の問題としてとらえることができるようになり、また、異世代交流、当番実習、構成的グループエンカウンター、ストレスマネジメントにより自尊感情を高めることができる活動を行っている。

今後も農業高校の特色ある教育活動をとおして、自尊感情とコミュニケーションスキルアップを意識した取組を継続して行い、また、正しい知識・情報を選択し、自ら意思決定、問題を解決できるスキルを身に付け、健康をマネジメントできる力を育てる取組を生徒の発達段階を踏まえて行っていきたい。

── ◇ ──

次年度の第63回大会は恵庭市で11月に開催予定である。